

## 震災発生時の状況

### 不安の中会社へ

当時入社5年目の私が震災発生時にいた場所は自宅。突然の揺れとともに家が揺れ、家財が倒れる音が鳴り響いた。「揺れを感じるというよりも、周りの音や状況から何が起こったのかが分からなかった」と振り返る。その後、テレビで状況を確認し、公共交通機関が止まっていることを知ると、兵庫区からスクーターで会社へ向かう決断をした。道中では信号機が切れ、道路には割れ目や段差が現れ、三宮に近づくと渋滞が発生していた。復旧の兆しが見えない中で、不安を抱えながらも必死に会社へ向かった。

〈当時：血液搬送業務担当  
入社5年目〉

### 目を覚ました瞬間、 震災を実感

自宅で就寝中、激しい揺れに目を覚ました。最初はその状況が地震だとは気づかず、家財の倒れたり食器が割れる音でようやくそれを認識。家の中は足の踏み場もないほどで、外に出て神戸東部の街並みを一望すると、所々で黒煙が上がっているのが見えた。阪神高速も途中で途切れており、目の前にはまったく見慣れない光景が広がっていた。

〈当時：検査業務担当  
入社8年目〉



阪神・淡路大震災を赤十字職員としてご経験され、現在も血液センターで勤務されている9名の方にインタビューをさせていただきました。



### 自宅の窓から外へ

当時入社1年目の私は、地震が発生した時、自宅で就寝中だった。自宅は1階が傾き、2階も辛うじて残った状態だったが、1か月後には全壊。住んでいた住吉地区では、多くの木造建物が全壊し、鉄筋コンクリートの建物だけが残っていた。ドアから脱出できなかつたため、窓を通じて外へ逃れた。

〈当時：献血依頼要請業務担当  
入社1年目〉

### 当直中に地震発生

地震が起きた時、当直勤務で仮眠中だった。当直は搬送番2人と電話番1人の3人。突然の揺れに驚き、何が起こったのかが全く分からない状況に陥った。電話は繋がっていたものの、庁舎内では血小板の振とう機が倒れ、検査試薬が割れて異臭が漂っていた。

〈当時：血液搬送業務担当  
入社5年目〉

### 5階の部屋から揺れに 揺れて

5階建てマンションの5階に住んでいた私は、就寝中に突然の強烈な揺れで目が覚めた。揺れがひどく、体が何度も浮き上がり、部屋の隅に移動していた。幸いタンスなどは倒れなかったものの、食器棚が倒れてお皿やビンが割れ、ガラスが散乱していた。

建物自体は半壊だった。

その後、家族の無事を確認し、近所の同僚とともに車で血液センターに向かうことに決めた。道路が寸断されている状況の中、通れる道を探し、職場に向かった。

〈当時：血液搬送業務担当  
入社10年目〉



### 崩れそうなビルに

震災発生当時、私は自宅のある垂水区で揺れを感じた。自宅の裏のブロック塀が倒れ、ライフラインが切断された。三宮の職場へ向かうことはできず、旧職場であった明石運転試験場前献血ルームへ向かった。明石の施設は大きな損害を受けていなかったため、安堵したものの、崩れそうなビルが立ち並ぶ三宮の現状には恐怖を感じた。

〈当時：献血ルーム勤務  
入社10年目〉



## 驚きと不安の中で

自宅の自室で寝ていた。突然、大きな横揺れで目が覚めた。あまりの驚きに腰が抜けて布団から起き上がれなかった。しばらくして母親が来て、「地震やで、起きなあかんで」と言われてようやく布団から出た。

その後、最寄駅に向かい、列車の運行状況を確認したが、復旧の目途は立たず。駅は人であふれ、混乱した状況が広がっていた。数日間は自宅待機し、JRは動かなかったため、別の路線を使って会社へ向かうことになった。自宅は加古川近くで大きな被害はなかったものの、部屋の塗り壁が部分的に剥がれ、電灯のシェードが外れて畳の上に落ちてバラバラに破損していた。

〈当時：検査業務担当  
入社5年目〉



## 現実を目の当たりに

震災が発生した瞬間、私は自宅で就寝中だった。幸いにも自宅は新築マンションで、物理的な被害はなかったが、周囲では道路の亀裂や建物の崩壊が確認された。ラジオから崩壊の情報を聞き、車のナビのテレビでその様子を目の当たりにした。しかし、携帯電話は全く繋がらず、通信手段が断たれた状況だった。震災当日の朝10時頃、車で会社に向かったが、会社に到着したのは夜の11時過ぎ。そこから1週間は自宅に帰れなかった。

〈当時：血液搬送業務担当  
入社9年目〉

## 入社1年目の冬

私が地震を感じたのは、自宅で寝ていた時のことだった。突然、耳をつんざくような「ドドドーン」という音が響き、目を覚ました。家の壁に3ヵ所ヒビが入り、食器が割れて散乱していた。近所では屋根瓦が落ちる音も聞こえた。

震災の影響は周囲にも広がっており、自宅で身の回りを確認した後、乗用車で長時間かけて出勤した。交通渋滞や道路の損傷などが続く中、何とか職場に向かった。

〈当時：献血バス勤務  
入社1年目〉

## 震災時の業務と対応

### 血液搬送という使命感を胸に

多くの職員が出勤できない中、当直の職員と出勤できた職員のみで業務を続けることになった。地下駐車場では、血液運搬車が昇降式駐車場から落下しており、すぐに車を出せなかった。地上に停めていた車で血液を搬送し、医療機関からの発注が入るたびに、緊急走行で搬送を行った。

また、一時電話が不通となり医療機関からの受発注が全く取れない状況になった。そこで、搬送先をエリアで分担し、全て緊急走行で血液を山のように積んで各病院に向かった。そして医療機関の状況聞き血液が必要かどうかを尋ねてまわった。

渋滞や通れない道に苦しみながらも、一日中サイレンを鳴らしながら走行した。どこに行っても渋滞で、進むことができないことが多く緊急車両として走っているものの、サイレンを止めたり鳴らしたりするしかなかった。サイレンの影響で夜になるまで耳鳴りが止ま

らないこともあった。そして緊急事態の中での血液運搬という使命感を胸に、何とか病院へ届けるべく行動を続けた。



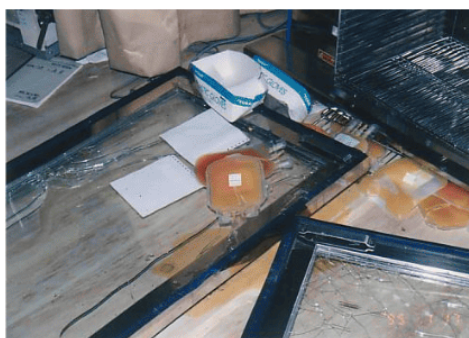
# 検査業務再開を 目指して

施設自体には大きな被害はなかったものの、検査機器が揺れで散乱しており、検査業務の再開は困難な状況だった。電気が通っていないため、検査課では一時的に水道も止まり、検査機器は完全に動かなくなっていた。

業務が再開できる目処が立ったのは、震災から1週間後。献血業務の重要性が高まる一方で、機器や人員の不足が深刻だった。大阪センターに業務を一時的に代行してもらい、私たちは機器の修理や検体発送に注力した。



資材を保管していた保冷庫が倒れており、中のものが割れて流れ出ていた。色々な薬品等が混ざって異臭を放り、それを除去するのが大変だった。そういった資材を揃え直して、業務を再開するまでには時間がかかった。大混乱の中だったため、業者の方に来てもらうのも難しかった。



# 部署を超え

震災発生からの数日は、血液搬送業務の補助に従事。信号機が止まり、路面の状態も悪化していたため、大渋滞が続いた。その中で搬送車は2名体制となり、渉外課職員（現在の献血バス職員等）は助手席で安全確認の補助を行った。震災当日は神戸市内から阪神方面の医療機関への搬送に同行し、夜には当直として活動を続けた。また、震災の影響で献血バスは約1ヶ月間稼働できなかつたため、先に稼働を再開した献血ルーム（明石・塚口）に応援に行ったり、三宮献血ルームから荷物の運び出し作業にも従事していた。

また、連絡の取れない職員の安否確認を行うなど、できる限りの支援を行った。



# 印象深い出来事

## 血液搬送中の おにぎり

あちこちの道路で発生した陥没や段差を除けながら行った震災当日の血液搬送業務。夜、血液搬送の途中で支援に向かわれている方から、おにぎりを頂いた。「ごはん食べてへんのやろ？おにぎり食べ」そういえば、ご飯食べてなかった…。

その日は空腹を感じる事がなく、いくらいの緊張感だった。特別なことだった。

## 先輩の姿

震災時、電話が不通となり、医療機関との連絡が取れなくなる状況が続いた。献血運搬車で医療機関を訪問する中で、倒壊の恐れがある高架下で避難している人々を見かけた際、先輩が「ここは危ない」と移動を促した場面が印象に残っている。命を守るという行動を目の当たりにし、自らもその精神を学んだ。

## 献血再開

震災直後は企業での献血ができなかったり、街頭献血でも震災の影響で献血バスを配車できる場所が限られていた。そのため、献血ルームがまず初めに再開した。

震災後、2月6日より明石・塚口両献血ルームが再開。開けた瞬間から驚くほどの方が献血にご協力してくださったことを今でも覚えている。

当時献血でいただいた血液は、全て兵庫センターで血液製剤として製品化していた。しかし、震災直後は兵庫センターで検査・製剤業務ができなかった。そのため、大阪センターへ検査・製剤化を委託することで献血業務が可能となった。

## まさに有事

自宅が尼崎市にあり、通常なら車で50分ほどで勤務地に到着する距離が、震災後はすべての道路が倒壊し、渋滞と通行止めで全く動けなくなった。

結果として、職場に一度到着すると、1週間以上は帰れない状況が続いた。勤務時間外でも必要な仕事があれば対応し続けた。まさに有事のような状況で、寝れる時に寝るしかなかった。会社では、机を並べて寝たり、廊下で休んだりしながら24時間体制で業務を続けた。



## 仲間と支え合って

震災後の数週間、公共交通機関が寸断されていたため、出勤には自家用車を使っていた。近隣の事業所が駐車場を無償で提供してくれ、また出勤時と退勤時には、最寄りの稼働している公共交通機関まで同僚と乗り合わせて移動するなど、協力し合いながら業務をこなしていた。

神戸の街中は真っ暗で、街頭の明かりも消え、車のライトだけが頼りの状態だった。帰り道では、同僚と日々の苦労や情報を交換しながら士気を高めていた。みんなお互いに支え合い、少しずつ前に進んでいた。

## 震災を経験したからこそ

震災後、神戸出身だということで、「大変でしたね」と声をかけていただくことが多かった。特に印象的だったのは、他県の血液センターから聞いた話。震災の影響を受けた時、各地で多くの献血者が協力を申し出ていた。

「何時間でも待って構わない」「自分の血液を神戸に届けてほしい」と、献血ルームが埋め尽くされるほどだったそう。その熱心な協力に感謝の気持ちを抱く一方、過度な献血の集中には危険が伴うこともあり、後にその経験が貴重な教訓となった。

3.11の東日本大震災当日、私は献血ルームで勤務していた。地震がきた直後、上司の指示で一切の呼びかけを辞め、のぼりを撤去した。なぜかという、阪神淡路大震災の時でも献血のご協力が同期間に集中した。つまり、献血ができない期間の人が一気に増えるということ。それを防ぐために、呼びかけを一切やめた。その時も献血協力者で溢れていたが、来られた方に頭をさげて、「今は全国的に多くの方にご協力いただいているため、5月、6月に改めてご協力いただけませんか？」と伝えた。当時は反発される方もおられたが、事情を伝えると納得していただけただけだ。蓋を開けてみると、5月、6月も安定して協力いただいております、阪神・淡路大震災の教訓を活かすことができた。

## 震災から学んだこと

### 誰かのために

震災を通じて、多くの人々が「誰かのために」という思いで行動していたことに感銘を受けた。震災の影響でライフライン・通勤で不便な思いをしている方がいたりといった状況にもかかわらず、2月から再開した兵庫県の献血会場に多くの方が献血に来てくださった。また、震災当日から災害支援に多くの方が被災地に駆けつけてくださった。業務として、ボランティアとして、と人それぞれであるが「誰かのために」と優しい思いやりを持った方が現実によくおられることを実感した。



## "光"となれる存在に

電車が少し動くようになった時、元町界限に行くことがあった。地震で店が倒れてしまったにも関わらず、すぐに食料品やガスの手配をして、1日でも早く商売を再開しようとしていた。

こんな環境でも活気を持って生活している方々の姿を見て感心したと共に、自分も頑張ろうと思えた。

普段はボランティアなどに関心のない自分の友人も、自ら施設に行って炊き出し手伝ってきたという話を聞くと、みんなの中には秘めた気持ちがあるのだと感じた。有事でなくても、暗いような世の中になってはいるが、明るい人がいるとそこから波及することであるのではないかと思った。そんなきっかけを作る人になれたらと思う。

## 赤十字職員として

震災を通じて最も強く感じたのは、「赤十字は多くの人々に頼りにされている」ということ。赤十字職員としての責任を再認識し、困難な状況下でも支援を求める声に応えるためには、日々の準備が不可欠であると痛感した。



日本赤十字社